

琉球大学学術リポジトリ

鳩間島の口承文芸研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2018-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加治工, 尚子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/40993

序章

- 第1節 研究背景
- 第2節 研究目的
- 第3節 研究方法

第1章 八重山諸島の民間伝承研究の概況

- 第1節 沖縄地域の伝承資料の整理
- 第2節 八重山諸島の伝承資料の整理
- 第3節 鳩間島の伝承資料の整理
- 第4節 まとめ

第2章 鳩間島の島建て伝承

- 第1節 伝説にみるフナヤギサマ像
- 第2節 歌謡にみるフナヤギサマ —鳩間島の雨乞い歌〈ハヤミ句〉—
- 第3節 歌謡にみるフナヤギサマ —竹富島と平得の雨乞い歌から—
- 第4節 まとめ

第3章 鳩間島の「産神問答」と「炭焼き長者—再婚型」

- 第1節 鳩間島の運定め話
- 第2節 鳩間島の聴取話のタイプ
- 第3節 「事物由来」となる結末
- 第4節 まとめ

第4章 鳩間島の「病魔退散—報恩型」

- 第1節 鳩間島の本格昔話と伝承状況
- 第2節 鳩間島の「ナーマヤー由来」
- 第3節 鳩間島の「風邪の神様」
- 第4節 まとめ

第5章 鳩間島のカムラーマ

- 第1節 カムラーマとキジムナー
- 第2節 キジムナーの主要話型と両義性
- 第3節 豊年祭のカムラーマ
- 第4節 口承伝承のなかのカムラーマ
- 第5節 まとめ

終章

- 第1節 鳩間島の伝承の特質
- 第2節 まとめと課題

参考文献・資料

序章

日本列島の南西端に位置する八重山諸島の中のひとつに鳩間島がある。周囲 4 キロメートル弱の小さな島である。戦後すぐの絶頂期の人口は 654 人、日本復帰の頃に 33 人の最少人数を記録してからあとは、40 人から 70 人前後の増減を繰り返しながら推移している。2017 年現在の人口は 48 名（34 世帯）となっている。

沖縄国際大学の遠藤庄治を中心とする口承文芸学術調査団が八重山地域での調査活動を開始したのは 1975 年である。（本稿では以下、「昭和調査」と称する。）その年の鳩間島の人口は 35 人。多くの島民が島を離れてしまった後に始められた聞き取り調査であった。明治 30 年代後半生まれの話者がまだ健在の頃であり、本格昔話や動物昔話などが記録されている。筆者が八重山での調査に参加したのは 1995 年から 1998 年にかけてである。初回の調査からはおよそ 20 年の歳月が経過していた。（本稿では以下、「平成調査」と称する。）当時の鳩間島の人口は 44 人。話者の多くは大正生まれであった。今回、新たに 2015 年から 2017 年にかけて補足調査を行ったが、過去 2 回実施した昭和調査と平成調査でお世話になった話者のほとんどは物故者となっており、昭和一桁生まれの方々が長老と呼ばれる世代になっていた。奇しくもそれぞれの調査の間には 20 年毎の間隔があることになる。単に世代が変わったというだけではなく、島で聴取できる話の内容にも変化がみられた。

要因としては、過疎化と共同体での祭祀の変化が考えられる。過疎化の背景には鳩間島の生活の困難さがあった。水道・電気・港湾は昭和 50 年代によりやく整備されるが、それまでは飲料水や田んぼなども向かいの西表島に頼る不自由な暮らしが続いていた。また収入を得られるような産業に乏しく、職を求めて或いは子どもの進学を機に島を離れていく家族も後を絶たなかった。

島を離れた人々も祭には帰ってくる。とくに、毎年旧暦の 6 月に行われるプール（豊年祭）は「島が沈む」と表現されるほどのにぎわいを見せる。奉納芸能は石垣島や那覇のそれぞれの郷友会で練習を重ね、祭の本番でお披露目されることになる。その所作や決まり事にもアレンジが加わるようになっていった。他島の芸能や舞踊教室で習った手に置き換わってしまい、島の伝承を軽視する傾向がみられた。このような担い手の意識の変化は、鳩間島の伝承、すなわち祭祀や年中行事、伝説等への変化をもたらしている。2009 年には島の行事を掌るサカサ（神司）が不在となった。2010 年の豊年祭では、男性の公民館長が祭祀を執り行い、サカサは助言者のかたちでその傍らに寄り添っていた。高齢となったサカサは、引き継ぎ者がいないままにその役をおりざるをえなかったのだという。鳩間島の友利御嶽にはサカサしか入れない男子禁制の場所がある。豊年祭の初日の朝、そこに収められている宝物を磨くのだとされる。このような島の重要な祭祀においても変化・形骸化がますます進むことが予想される。

聞き取り調査で感じたことは、鳩間島で伝承される島建てや御嶽の創建にかかわる人物伝説についての薄さであった。鳩間島の近隣の島々で聴取される類話をみると、それらの人物についての傑出した知勇や豪胆ぶり、特殊技術、某家の先祖などといったつながりや

事績を伝えるものが多い。しかし、鳩間島の人物伝説では主要人物の具体的な功績が語られることがほとんどなかったのである。この点に関しては、筆者の調査技術の未熟さを一方の要因として反省しつつ、他方では、鳩間島の口頭伝承の一つの側面として捉え、本研究でその要因を掘り下げて考察してみることにした。人物伝説の一つは、雨乞い歌の歌詞からその内容を確認することができる。この歌は雨乞いの機会にのみ謡われるものであり、水道設備の整った現在においてはその機会さえもなくなってきている。さらに、この歌詞や祝詞はサカサなどの神役によって伝承されるものとされ、普段の生活において島人にはほとんど触れる機会がなかった。口頭伝承には、このような祭祀や芸能に結び付けて伝えられ、保持されているものがある。寄せて語られるモノやコトがなくなってしまうと、伝承は次第にゆらいでいくであろう。鳩間島の伝承には、このような消滅の危機ともいえる状況が迫っている。

昭和調査のはじめから過疎化による共同体の崩壊といった危機意識を抱えながらの調査であったため、これまでの調査は資料収集に偏向しており、聴取した資料を活用しての研究面が弱いのではないかという指摘を絶えず受けてきた。人口の減少や祭祀等における神役の不在は、過酷な島での生活に欠かせなかった先人の知恵や考え方を受け継ぐ機会を失うことにつながる。そして、インフラなどの社会基盤の整備や新しい機械・技術がもたらす恩恵は、相互扶助に頼ることがなくとも島で生きていくことを可能にする。島で生活を営む者にとっては、この改善はむしろ歓迎すべきであり、今更、昔の生活や古い考えを持ち出すことに違和感を覚える者もいるであろう。昔のほうが豊かで良いという懐古趣味では決してないが、今を一つの過渡期と捉えて記録しておくことは意義あることだと考える。最近の豊年祭をみただけでは、鳩間島では男性が祭祀を仕切るのだという印象を受ける。現状ではそうなっているので間違いだとはいいきれない。これまでも少しずつ祭祀などは変化してきているし、祭のたびに見解の相違が話題にあがったりもする。表面上の見た目の違いは指摘しやすいが、なぜそうしているのかといったような共同体の内面にある思いや考え方、経緯などについては、語れる人がいるうちに聞き取りなどを行って記録し、地域への還元や次世代への継承に努めていかなければやがて消滅してしまうであろう。まだ有形・無形の伝承の両方が残っているうちに、双方を結びつける形での記録と研究が必要である。

そこで、本研究では、鳩間島において行った昭和調査、平成調査の聴取話の整理を行い、その中から島建てに関する伝承、除災方法の由来を伝える伝承、祭りに登場する妖怪の伝承に着目し、行為や伝承に込められた鳩間島の人々の昔ながらの知恵や技術、考え方を明らかにすることを目的とする。

鳩間島の聴取話資料は報告例が少なく断片的なものが多い。そのため、これまでの口承説話研究の枠組みでは扱うことが困難であった。本研究の目的は説話そのものではなく、そこから伝承地域の知識や考え方を導き出そうとするものである。それらの意味をとらえるために、八重山諸島全域の調査記録や研究報告等を活用して補うこととした。

日本の主要な聴取話資料については、稲田浩二編『日本昔話通観』（第 28 巻）昔話タイプ・インデックス¹、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』（第 26 巻）沖縄²に整理されたものを参考にした。沖縄県の主要な聴取話資料については、沖縄国際大学の口承文芸学術調査団が中心となって収集・整理したカードと翻字データを用い、適宜、Web 上に公開されている「東アジア民話データベース」³で検索して原資料にあたるという作業を行った。八重山の古謡や御嶽の記録については、喜舎場永珣⁴や牧野清⁵などの研究をまとめた著書があり、鳩間島からも言語や民俗芸能などの多くの研究報告がなされている。それらの先達の研究を参考にし、鳩間島の古老からの補足説明を手掛かりにして考察をすすめた。

第 1 章 八重山諸島の民間伝承研究の概況

本章では、鳩間島が属する八重山諸島や沖縄県全域の伝承と記録についての概況を把握すべく、書承および口承資料の整理を試みた。

沖縄地域の伝承資料の整理

まずは、沖縄全体の民間伝承資料について概観するため、南島をフィールドに多くの調査を重ねてきた福田晃、遠藤庄治らの研究成果を手掛かりに、民間伝承資料の探索と整理を行った。1973（昭和 48）年から 6 年間にわたり沖縄県内各地を調査した福田らの研究成果は、中間報告として『沖縄地方の民間文芸』（1979）⁶にまとめられている。その概説編の各担当者の記述および同時期に発表された辺土名朝三の論考⁷をふまえ、市町村史の民話編等に掲載された近世の文献資料ならびに調査団による組織的調査の成果報告書等の資料を補足した。

八重山諸島の伝承資料の整理

つぎに、八重山諸島全域の資料について、宮良安彦「八重山諸島石垣島の民話」⁸や各地の民話集や島誌・字誌を手掛かりに、竹富町の島々や与那国島の資料を捕捉して整理した。また、八重山地域の民間伝承の特質について、この地をフィールドに多くの調査を重ねてきた福田と遠藤の考察では、①伝説的（由来譚的）傾向、②星の由来としての昔話群、③

1 稲田浩二編『日本昔話通観』（第 28 巻）昔話タイプ・インデックス、同朋舎出版、1988 年。

2 稲田浩二編『日本昔話通観』（第 26 巻）沖縄、同朋舎出版、1983 年。

3 東アジア民話データベース、

<http://minwadata.fn.senshu-u.ac.jp/EastAsiaMinwaDB/scholar/AreaDatabase/indexOkinawa.html>

4 喜舎場永珣：石垣島在の郷土史家。八重山研究の開拓者。『八重山歴史』（1954）、『八重山民謡誌』（1968）、『八重山古謡』（1970）などの著作がある。

5 牧野清：石垣島在の郷土史家。『八重山のお嶽：嶽々名・由来・祭祀・歴史』（1990）、『八重山の明和大津波』（1968）などの著作がある。

6 福田晃「〈概説編〉昔話」 福田晃 編『沖縄地方の民間文芸〈総合研究〉Ⅰ』三弥井書店、1979 年。

7 辺土名朝三「沖縄の民話運動」日本民話の会編『民話の手帖』第 14 号 春 日本民話の会、1983 年。146-156 頁。

8 宮良安彦「八重山諸島石垣島の民話—古文献および標準語記述記の民話—」石垣繁編『宮良當壯記念論集』宮良當壯生誕百年記念事業期成会、2000 年。

動物昔話の宝庫の 3 点をあげている。この傾向は、行政区域でいう石垣市、竹富町、与那国町の全体聴取話を話型分類と聴取話型数から分析したものであるため、個々の島単位では必ずしも当てはまるものではない。鳩間島の傾向については、別途掘り下げる必要がある。

鳩間島の伝承資料の整理

〈鳩間島の民話調査の概況〉

本節では、1975(昭和 50)年 8 月から 1997(平成 9)年 11 月までに行われた、計 6 回の鳩間島の民話調査を参考に、成果の集計と伝承状況の考察を行う。各回の状況は表 1 参照。

掲載資料については、昭和期に 2 回行われた調査のうち、1975(昭和 50)年 8 月分は調査テープ不明のため調査ノートの記述のみを参照した。1976(昭和 51)年 8 月分は調査ノートを参照し調査テープから翻字して基礎資料とした。1996(平成 8)年 8 月以降の 4 回の調査にはすべて筆者がかかわっており、調査カードをもとに比較的語りのよい話を翻字して基礎資料とした。これまでの鳩間島における聞き取り調査成果について、調査報告書⁹を見直し、当時の調査ノートの内容を加筆修正して以下に整理した。

表 1 鳩間島民話調査日程別集計表

回	調査年	月日	出席者数	話者数	聴取話数	テープ	調査員
1	1975 年 (昭和 50)	8 月 7 日	1	1	4	なし	不明
		8 月 8 日	4	4	23	なし	不明
2	1976 年 (昭和 51)	8 月 4 日	4	4	5	1	3
		8 月 5 日	1	1	8	1	3
3	1996 年 (平成 8)	9 月 13 日	1	1	8	1	3
		9 月 15 日	7	7	75	5	10
		9 月 16 日	2	2	6	1	2
4	1997 年 (平成 9)	3 月 16 日	3	2	14	1	1
		3 月 30 日	1	1	13	1	1
		3 月 31 日	2	2	7	1	1
5		9 月 6 日	2	2	15	1	3
		9 月 10 日	1	1	2	1	1
6		11 月 20 日	1	1	17	1	1
鳩間島民話調査 計			30 名	29 名	197 話	15 本	29 名

〈鳩間島の民話調査成果〉

表 2 は、これまでに鳩間島の民話調査で聴取した全ての話を話型ごとに分類したものである。なお、ここでいう話型数とは同じ内容の話を 1 話型として集計したもので、実話数では同一話者の重複した話を 1 話とカウントしている。

※ 分類については、他の八重山地域に民話と比較するため遠藤の分類案を採用した。

〈鳩間島の鳩間話者別聴取話一覧〉

話者別の聴取話を表 3 にまとめ、聴取話数の多い話者順に掲載した。比較的語りのよい翻字話がわかるように●印をつけた。なお、希少話については断片であっても翻字することとした。(表 3 は 論文要約での掲載を省略)

⁹ 加治工尚子「鳩間島の民話沖縄国際大学文学部国文学科、平成九年度卒業論文、1997 年。

表 2 聴取話分類表 (1997年 筆者作成)

分類		話型数	聴取話数	実話数	
民話	伝説	島内伝説	53 話型	113 話	97 話
		人物伝説	2 話型	5 話	5 話
	昔話	本格昔話	12 話型	27 話	21 話
		動物昔話	7 話型	23 話	20 話
		笑い話	0 話型	0 話	0 話
民話 計		74 話型	168 話	143 話	
民俗	歌・諺・唱言		2 話型	2 話	2 話
	民俗・説明		26 話型	27 話	27 話
	民俗 計		28 話型	29 話	29 話
聴取話 合計		102 話型	197 話	172 話	

〈鳩間島の聴取話概観〉

これまでの鳩間島の聞き取り調査で、総聴取話数 197 話 (102 話型) の話を聴取した。表 2 で分類したとおり、最も多くの話型・話数を聴取したのは「伝説」の 55 話型、118 話である。その内容としては、鳩間島の聖地 (御嶽・井戸) や豊年祭や民俗行事に関する島内伝説が多い。島の中心的な御嶽は友利御嶽であるが、そちらよりも髭川御嶽の由来のほうに語られる内容がしっかりしている。これは、髭川御嶽の由来が舟漕ぎ競争の由来として行事に結びついて語られているためだと考えられる。また、島建てに関する人物として「船屋儀佐真」の話が出ているが、友利御嶽よりも、そのお墓だとされている西堂御嶽についてより傾いた語りになっている。これは、話者が西堂御嶽の関係者であることが影響しているとみることができる。

伝説とするか昔話とするか分類が難しいのだが、「ナーマヤー由来」や「ピャークの由来 (額の鍋墨)」などが習俗の由来として語られている。この話型は地域によっては「火の神退散」「病魔退散」、「運定め話」といった本格昔話に分類されて紹介されることが多い。鳩間島の場合、それぞれ習俗の由来や土地に結び付けて語られているため、その内容からより伝説に傾いていると判断し、現段階では伝説に振り分けた。しかし、どちらの要素をもふくんでいる話型である。

次に、「十五夜の由来〈首のない影〉」についてみていく。この話は、月に照らされた男の首から上の影がないことから、その後の男の運命を予見するといった内容と、吹上餅の色はその時に流された血を意味するということ、お月見には器に水を入れて置いておくようになったという由来が付属して語られる。これもまた事物や行事に寄せて語られており、月や水面に映る影に対する話者のイメージの一端をうかがうことができる。天体に関する話として鳩間島で聴取できたのは「十五夜の由来」だけであった。群星やパイガ星などの話も聴取されているが、これは潮の干満や農業に関する時期をみるためといった民俗的な内容であり、民話的な要素は欠如していた。

動物昔話については、7 話型 23 話聴取されている。広域昔話に含まれる「雀孝行」「雲雀と生き水」のほか、八重山各地で聴取される「子売りファー鳥」「フクラビ自慢」といった

話はもれなく聴取できている。「竹の葉魚の話」はヒラメが片身である理由を語る話型だが、他の地域での聴取例が極めて少ない話であり、沖縄県内の動物昔話の聴取例としても貴重な資料といえる。

その他、人物伝説は2話型しかなく、笑い話は1話も聴取できていない。広域伝説や笑い話などは他者や他地域との交流の影響が反映される話型である。この分野の聴取話が少ないということは、交通網の発達した現在でも「八重山一交通の便が悪い」といわれている鳩間島の地理的特性の影響が考えられる。

八重山地域の伝承の特質として、福田や遠藤が示した①伝説的（由来譚的）傾向、②星の由来としての昔話群、③動物昔話の宝庫であることの3点を取り上げたが、ここでは鳩間島の伝承について考察した。①伝説的（由来譚的）傾向についてはあてはまることがわかった。②については1話型しか見出せなかったので豊富とは言い難い。③については鳩間島の伝承にもあてはまるといえる。話者の語りの得意不得意もあるが、昔話系を得意とされる話者からは語りの良い動物昔話がまんべんなく聴取できている。伝説や本格昔話では断片が多い中、動物昔話は語りがよい。それには、話の構造が単純であること、実際の動物たちの生態や特徴をとらえた内容であることなどが考えられる。

昔話の聞き取りに偏向気味であったとする昭和調査の反省のもと、平成調査では伝説を含めた聞き取りを行うという姿勢で取り組んだ。そのために伝説の話数は増えたが、その内容としては断片的なものや、行事由来などに偏ったものとなった。

異類報恩譚として聴取できた「ナーマヤー由来」と「風邪の神様」は、火事除け、疫病除けの由来譚として沖縄各地で類話が聴取できる話である。とくに、「ナーマヤー由来」については、鳩間島にそのナーマヤーの屋敷跡があるとして語られ、島内の特定箇所と関連付けて語られるという特徴がある。沖縄本島の宜味村や八重山諸島の新城島の伝承においても特定の家や人物の名前に寄せて語り伝えられているため、それらと比較したい。

まとめ

本研究で扱う鳩間島の伝説や昔話などの口頭伝承は、そのほとんどが断片であり、およそ民話集などには取り上げられないことのない素材である。比較研究においては他地域の整った素材に及ばないかもしれないが、鳩間島に焦点化した地域研究であれば大いに活用の道があると考えられる。八重山研究の先達が残した文献資料の成果を借用しつつ、鳩間島で聴取した島人の考えや思いを整理し、還元に資するものとした。

第2章 鳩間島の島建て伝承

鳩間島の聞き取り調査で登場する人物に、フナヤギサマとナーマヤーがいる。前者は島建て伝承や島内の御嶽にまつわる人物で、後者は屋敷跡だとされる場所や習俗と結びついて語られる人物である。両者のうち、フナヤギサマについては島建てに関わる人物ながら、伝承の中ではその人物像の印象が希薄である。この印象というのは同時期に進行していた八重山諸島の他島での調査と比較しての筆者の主観に過ぎないが、島建てに関わったり御

嶽に祀られたりするからには、何かしらの神秘性や事績、功績などが語られるものである。しかし、フナヤギサマについては、宮古島との関係やその移住経路については、程度の差はあるもののどの話者からも聞くことができたが、島建てや友利御嶽と関連があるらしいということ以外、具体的な事績については聞き取り調査の段階では不明なままであった。この人物像の薄さは何を意味しているのだろうか。ここでは、鳩間島のムトゥウガンと称され一目置かれる存在である友利御嶽に関わりがあるとされる人物フナヤギサマに着目し、鳩間島に伝わる伝説や歌謡と近隣の島々の伝承とを比較しながらその人物像を探ってみたい。なお、フナヤギサマについては、これまでの書籍や資料等で船屋、舟屋、儀佐真、義佐真、義舎など多くの漢字表記が用いられているが、本章では主としてカタカナ表記でフナヤギサマとしておく。島によって呼称が異なるため、適宜フナヤギサマを用いる。

伝説にみるフナヤギサマ像

本節で取り上げる伝説は、平成8年から9年にかけて行われた、沖縄国際大学の竹富町口承文芸学術調査団の記録が主となる。その他、筆者単独で鳩間島出身の方々から数回にわたる補足調査を行った際の聴取話の翻字を適宜追加した。ここでは、鳩間島の島建てや御嶽、井戸などにまつわる伝承のうち、フナヤギサマに関連する部分を抽出して示す。

例話 1 は、友利御嶽の由来だが、かなり断片的な語りである。この例では、友利御嶽は鳩間島のムトゥウガン（元となる御嶽）であり、島の創建にかかわる御嶽として認識されていることがわかる。具体的に祀られている神の名は語られていないが、島外（宮古）から来たこと、最初にフナバル浜に船着きしたこと、そこでは定住されなかったこと、そして友利家とのかかわりがうかがえる語りとなっている。

例話 2 は、友利御嶽のこととして語っていただいているのにもかかわらず、ここでも祀られている神の名はあらわれていない。その一方、島建てに際して、井戸の存在や高台ということが場所選定の要であったのではないかという話者の見解と、元のお宮、つまり友利御嶽の表記には友利という漢字が当てられているが、本来は「トゥモル」であり、真ん中とか中心ということの意味すると認識されていることがうかがえる。友利御嶽と鳩間島の友利家との関係は語られなかった。

例話 3 は、鳩間島の友利御嶽と同じ姓を持つ友利家につながる方から、島への移住の経緯をうかがった際の記録である。ハトマギサマまたはフナヤギサマと称される人物がかかわり、それが宮古から来たことと認識されていることはうかがえるが、友利御嶽と友利家との直接的な関係についてはよくわからないとしている。

以上の 3 例から、フナヤギサマは、ハトマギサマとも称されていることはわかったが、友利御嶽との関連を示す語りを聴取することはできなかった。しかし、友利御嶽とは別の場所に位置する西堂御嶽がフナヤギサマの墓であると伝えている語りがある。西堂御嶽に関する 2 つの例話では、西堂はお墓であること、そこに祀られているのはフナヤギサマであること、その墓が宮古に向けてつくられていること、なぜなら宮古島出身だったからということが語られている。

鳩間島の伝説からフナヤギサマの人物像について確認しておきたい。①宮古の出身であること。②「パチナマリ・イチナマリ」という表現から、長男や最初の子としての認識があること。③西堂には二人祀られているが夫婦であったかどうかは定かではないこと。④島にフナヤギサマの子孫が残っていないこと。この4つのうち、①について、友利御嶽には鳩間島の島建てに関わる神が祀られており、その神は宮古と何らかのかかわりがありそうだということは、今回の聞き取りで関わったすべての島人の間で共通した認識であった。②については祭祀の際の歌謡にそのフレーズが出てくる。③と④については、西堂御嶽の話者からしかうかがうことができなかった。聴取話の例は以上である。つぎに、①と②について、鳩間島に伝わる祭祀歌謡の中からフナヤギサマ像についてみていきたい。

歌謡にみるフナヤギサマ — 鳩間島の雨乞い歌〈ハヤミ句〉 —

聞き取り調査では具体的な印象の乏しいフナヤギサマであったが、鳩間島の雨乞い行事の歌謡にその名が登場する。歌詞は『竹富町史 第六巻 鳩間島』「第8節 雨乞いの歌謡」（大城學）¹⁰を参照されたい。鳩間島の雨乞いの際に友利御嶽で謡われる雨乞い歌〈ハヤミク〉は30番まであり、24番で鳩間島まで辿ってこられた「ふなやぎさ」という人物の名前が明らかになる。その前段では、「うふやまとう」からはじまり、船で鳩間までやってきた様子が謡われる。そして、25番からは「ふなやぎさ」の事績が述べられる。この歌詞の解釈については、大城公男『八重山 鳩間島民俗誌』¹¹の「神の経歴」に詳しい。

大城學が記録した「雨乞い歌〈ハヤミ句〉」の歌詞と大城公男の解釈から、雨乞い歌の中では、フナヤギサという人物が「井戸を掘って人々に飲み水を与えた人」として讃えられ、歌の冒頭に登場する「龍神様」と一緒になって雨を降らせてほしいという島人の祈りが込められていることがわかる。また、大城公男は「フナヤギサと鉄」という項において、「井戸を掘ったということは鉄の道具の存在なくしてはあり得ない。つまり、フナヤギサは鉄を持ち込んだ人物であった」という見解を示している。そして、竹富島と平得の雨乞い伝承に触れ、フナヤギサが同名で登場し、「船乗りであったことと、井戸を掘ったという点では一致する」と述べている。つぎに、鳩間島の雨乞い歌の解釈では詳しくふれられていなかった表現について、竹富島の「ふなやぎさ」と平得の「雨乞い歌」を確認する。

歌謡にみるフナヤギサマ — 竹富島と平得の雨乞い歌から —

ここでは、「フナヤギサマ」の人物像について、近隣の島々の歌謡にあらわれるというほぼ同名の人物の例からアプローチを試みた。実際の雨乞いには接する機会が得られなかったため、資料は外間守善・宮良安彦『南島歌謡大成 IV八重山篇』¹²（以下『南島歌謡大成 IV』）より、竹富島の「ふなやぎさ」と石垣島平得村の「雨乞い歌」を参照し検討を行った。

まとめ

ここまで、フナヤギサマの人物像について、鳩間島の伝承を取り上げて具体的なイメー

¹⁰ 竹富町史編集委員会『竹富町史 第六巻 鳩間島』竹富町役場、2015年。

¹¹ 大城公男『八重山 鳩間島民俗誌』榕樹書林、2011年。

¹² 外間守善・宮良安彦『南島歌謡大成 IV八重山篇』角川書店、1979年。

ジの乏しさを示し、つぎに八重山地域の古謡集から、鳩間島、竹富島、石垣島平得の雨乞い歌を取り上げてみてきた。やや雨乞い行事の紹介に傾いてしまったきらいはあるが、フナヤギサマが登場する雨乞い古謡の中身をふりかえっておきたい。地名、古謡名、呼称、歌詞の順番と内容、行為の順に記す。

鳩間 雨乞い歌〈ハヤミ句〉 フナヤギサマ

- 1- 8 雨が欲しいという訴え
- 9-23 移動経路：大和大→神大和→大沖縄→首里沖縄→大宮古→島尻→多良間村→水納村→八重山島→大石垣→竹富（仲岳）→黒島（ヌバン浜）→我が鳩間
- 24-30 フナヤギサマ登場、以降、水を得た事績
[行為]水の茎、茅の茎を差す、野原頂の水を引き寄せた

竹富 ふなやぎさ フナヤギサ

- 1- 8 雨が欲しいという訴え
- 9-30 フナヤギサ登場、以降、水を得た事績
[行為]ぶなり神（姉妹神）、ぶばま神（叔母神）の水脈探し、標を立てる
井戸掘り（昼は人が掘り、夜は神が掘った）

平得 雨乞い歌 フナヤギサ

- 1 フナヤギサ登場
- 2-14 以降、水を得た事績
[行為]ぶばま（伯母）、ぶなり（姉妹）登場、標を結ぶ
井戸掘り（夜は神が掘り、昼は人が掘る）

鳩間、竹富、平得の3か所の雨乞い歌を比較してみると、やはり鳩間島のフナヤギサマは、行動の表現が抽象的で漠然としていることがわかる。茅の茎を差すという行為は他島での水脈に神の目印としての標を立てるという行為や儀礼と対応するものと思われるが、井戸を掘ることを示す表現が鳩間島では欠落している。姉妹神などの親族の登場もなく、「村建てに何か関係があるらしいね」という鳩間島の人々が持つあいまいさが雨乞い歌の比較を通してみても浮き彫りになった。鳩間島にはフナヤギサマが掘ったとされる井戸などもなく、平得と比較しての伝承の濃淡は、そのあたりのことも影響しているものと推される。つぎに、八重山の雨乞い行事をみるうえで参考にした黒島の伝承（フナヤギサマは登場しない）と雨乞い歌に登場するフナヤギサが御嶽の由来ともかかわっている平得の伝説についても略記しておく。

黒島 雨乞い行事と伝説

- ・雨の神の伝説：小人の神様が来訪し雨を降らせ、雨乞いの儀礼を教えて去る
- ・雨乞い行事の実際：野原井戸でのススキを使用した儀礼
- ・野原井戸の伝説：雨の神は小人の来訪神、歓待した家の畑は降雨に恵まれる、神が島を去るときに雨乞いの儀礼を教わる

平得 御嶽の由来と伝説

- ・フナヤムリィ御嶽の由来：フナヤギサはウーリヤー七兄弟の長男である
- ・多良間嶺の下から水元の神水を夜密かに求めて持ってきて呼び水にした
- ・井戸掘り：村民のために掘ったとされる井戸が集落に数ヶ所ある

黒島の雨の神や野原井戸の伝説では、小人の来訪神が島を訪れ、歓待した家の畑には雨を降らせ、やがて雨乞いの儀礼を教えて去っていくと伝わっている。この雨の神の姿には、「神霊は小人の姿で現れ、常人の出来ない仕事を易々と成し遂げるなどのことをする」とされる小さ子譚が想起される。また、平得の七人兄弟については、与那国島に伝わる大屋（ウブヤ）七人兄弟と通底するものがある。与那国の七人兄弟は、水田の開発や造船、建築などに関する起源譚として伝承されている。そして、いずれの話も、鍛冶神や八幡信仰を持つ集団との関連が指摘されていることに注目したい。

鳩間島のフナヤギサマ像について探ることから、八重山地域の雨乞い儀礼と関連伝承についての比較検討を行なった。ダムや水道設備が整った現在においては、あまり接する機会がなくなった雨乞い行事については、そのほとんどを文献資料で確かめるしかない。喜舎場の「雨乞い行事に関する覚書（補遺）」¹³からも、雨乞いに対する視点を再認識させられた。雨（水）に対する思想は雨乞い行事だけに限ったことではなく、その他の民俗行事や伝承の端々にうかがうことができる。雨乞い歌にフナヤギサマが登場するのは、龍神などの島外の神への祈願においての村の代表としての筋の名乗りであり、一方では、島建てや井戸掘りに対する能力を讃えることでその事績の再現を願う島人の思想がうかがえる。そして、フナヤギサマや友利御嶽の創建に関わったと思われる集団には、鍛冶文化とのかわりが指摘され、そこに炭焼長者譚などの伝承がついてまわることも指摘されている。

鳩間島の伝承のみではみえてこなかったことが、周辺離島の伝承と比較することで欠落部分を補いつつ推察することができた。伝説や歌謡や習俗とすぐに分類して別個に検討するのではなく、相互の関連を丁寧に観察する姿勢を今後の研究でも留意したい。さらに、比較研究に際しては資料を文献から採ることが多かったため、地域ごとに素材資料の質と量に差があることを改めてつきつけられた。過疎化が著しい鳩間島においては、比較研究に耐えうる原資料を整えることも喫緊の課題である。既存の資料を十分に活かせるよう、整える際には質を意識して残すことを心掛けたい。

¹³ 喜舎場永珣『八重山民俗誌』上巻・民俗篇、沖縄タイムス社、1977年。79頁。

第3章 鳩間島の「産神問答」と「炭焼き長者一再婚型」

鳩間島の運定め話

日本全土に広く伝承される運定め話のうち、「炭焼き長者一再婚型」「運定め一男女の福分」「産神問答」タイプの話が鳩間島から聴取できた。このタイプは、沖縄の三つの民話圏で確認できる主要話型の一つである。炭焼き長者譚の研究は、多くの研究者によって詳細な分析が行われてきた。結末が竈神の由来となる東アジアからの報告例などもあり、神によって定められた運命とそれを避けようとする人間の葛藤譚はアジアからヨーロッパまで広く分布していることも確認されている。

本稿では、鳩間島で聴取した話柄を中心に、昔話タイプ・インデックス¹⁴によってその典型話を確認し、モチーフの差異などからこの伝承を支える社会的条件・精神風土について考察する。

鳩間島の聴取話のタイプ

昭和51年、平成8年、平成9年に鳩間島で聴取された例話を紹介し、タイプとモチーフを確認する。

例話1 運定め話	【 運定め一男女の福分 】 [女の福分、生姜の由来]
例話2 ピヤックの由来	【 運定め一額のしるし 】 [額に鍋墨をつける習俗の由来]

例話1のモチーフ構成 ※典型話を参考に共通モチーフには対応する番号をつけた

- ③男（夫）が麦飯を不満として女（妻）と離縁し実家に帰す
 - ・妻は妊娠していたため、生まれた子には箕を売る男が来たら親切にするように教える
- ⑤ソーキ（箕）売りとなった男が女の家で出された麦飯を食べ、先妻だと知って舌を切ってしまう
- ⑥切れた舌を埋めると、そこからショウガが生えた
 - ・ショウガは必ず洗ってから食べるものだという

この例話1は、貧しい男が女の援助で裕福になるという致富譚ではないため「145A 炭焼き長者一初婚型」ではない。また、発端と結末などから「147 運定め一男女の福分」ではなく、「145B 炭焼き長者一再婚型」としてモチーフを確認する。稲田の指摘¹⁵するとおり①②のモチーフが欠落している。また、女は実家に帰っただけであり、④の再婚して裕福になるモチーフも詳しくは語られていない。そして、⑥の結末については、典型話の多くが「たばこの起源」を語るのに対し、鳩間では切断された舌を埋めて生えてきたのは「ショウガ（生姜）」であると語られる。

例話2のモチーフ構成

- ・妻は妊娠しており、つわりのため麦飯が食べたい
- ・いくら搗いても皮がむけない麦に涙が落ち、濡れたために皮がむけた

¹⁴ 稲田浩二ほか編『日本昔話通観 第28巻 昔話タイプ・インデックス』同朋社出版、1988年。

¹⁵ 稲田は、145B 炭焼き長者一再婚型の注において、(1)このサブタイプは福分を持つ女の運命を語ることに中心が置かれる点で「運定め一男女の福分」と区別されること、(2)伝承は西日本におもむくほど厚いが、沖縄ではもっぱら③以下を語り、①②の産神問答はないと説明している。

- ③旦那は麦飯を不満として奥さんを追い出す
- ・奥さんは馬小屋で泣いているが出ていく
 - ・そのあとを蝶々がついていく
 - ・旦那はソーキ(箕)売りとなる
 - ・奥さんはその後生まれた子に、ソーキ売りが来たらあなたのお父さんだから必ず買うようにいう
- ⑤ソーキ売りとなった男が女の家で出された麦飯を食べるが、その女が先妻だと知って舌を噛み切ってしまう
- ⑥落ちていた舌を埋めると、そこからショウガが生えた
- ・ショウガは必ず皮をむいてから食べるものだという

この例話 2 もモチーフ構成から「一再婚型」として考察する。①②のモチーフはここでも欠落している。妻が麦飯を食べるのはつわりのためであり、前半部分には「継子話」の一つである「継子の麦搗き」のモチーフが語られている。これはおそらく「麦」という要素から連想して別系統のモチーフが混入したものとみられるが、翌年の調査でも同様の展開で「一麦搗き」が語られていたため、語り違いではないことがわかる。③以降、追い出された女が馬小屋で泣いたあとに出ていくが、その女の後を蝶々がついていくくぐりがある。女がどこへたどり着いたのか、再婚しているのかは語られていない。⑥の結末部はこの例もショウガの由来になっている。

「事物由来」となる結末

鳩間島の例話では「舌を埋めるとそこからショウガが生えた」という結末を持ち、「だからショウガは必ず洗ってから食べるものだ」と伝えられている。島の習俗として「ショウガは必ず洗って皮をむいてから食べるものだ」と認識している例はほかにも確認できたが、その場合、由来譚についての認識は欠如しており、「なぜそうするのかはわからないが、そうするようにいわれているから」とのみ語られる。以下に、結末部についての周辺地域のバリエーションを確認しておきたい。

- a. 死体を埋めるとそこからタバコが生えた（本部町、東村）
- b. 竈の後ろに死体を埋め、竈に麦の穂を祀るようになった（伊良部島）
- c. 恥じ入り、箕に隠れるとそのまま亀になった（石垣島、小浜島）
- d. 恥じ入り、セミになった（黒島）
- e. 舌を噛み切って死んだ男を埋めた場所から生姜がはえた（竹富島）

a. のたばこの由来については、145B の典型話の結末もたばこの起源となっており、沖縄本島北部地域のほか、鹿児島市や徳之島からの報告もある。b. は竈神の信仰をうかがうことができる。この点については、柳田国男や福田晃らの研究に詳しいのでここでは詳述しないが、竈神の由来として『神道集』¹⁶ 卷 8 第 46 話「釜神事」と卷 7 第 42 話「葦苺明神事」に「産神問答」と「炭焼き長者」の型が融合した例があることだけ添えておく。c. 箕に隠

¹⁶ 貴志正造翻訳『神道集 東洋文庫 (94)』平凡社、1967年。

れて亀になった例は、箕の形状からイメージされたことが推測できる。d. 蟬になった例は、蟬の鳴き声と黒島の方言との関係が語られる。先妻に「私が誰だかわかるか」と問われ「シェーン、シェーン（わかる、わかる）」と喋って蟬になったという。この鳴いて蟬になる例は新潟県の西蒲原郡の例話にもみられる。e. に鳩間島と同じく、ショウガの由来につながる話が竹富島にあった。このように、結末部の植物や動物への転生譚については、このモチーフの定着に、死体から栽培植物が発生したという「ハイヌウェレ型神話」や日本神話にあるオオゲツヒメの死体から食物が生まれたという「死体化生神話」を受容する精神風土があることは、すでに多くの研究者によって指摘されているとおりで。

まとめ

鳩間島の運定め話を中心に、モチーフを整理してその要素について考察を行った。この話型が定着するには、人の一生の福分を授ける産神や穀物の神の存在、穀物を大切にしなければいけないという考え、神の使いとしての蝶のイメージ、魔除けとしての額の鍋墨、ソーキ売りや炭焼きという生業に対する意識などが背景にある。かつては当たり前の身近な生活道具であったソーキなどについても、使用した経験のない筆者へ様子を伝えるために、男性話者の語りは説明的な要素を多分に含んだものとなってしまった。モチーフを細かく見ていくほどに、伝承とそれを支えていたかつての島の生活との肌感覚のずれを再認識させられるものとなった。しかし、このギャップを補うものとして、これまではあまり顧みることのなかった断片的な「俗信」や「歌謡」の中に有効な要素が残っているという希望も見いだせた。今後はその部分についても関連付けて残していきたい。

第4章 鳩間島の「病魔退散一報恩型」

鳩間島の本格昔話と伝承状況

鳩間島で聴取した「本格昔話」12話型・全27話のうち、比較的モチーフが揃った話のよい話については、カセットテープからの翻字作業を行いテキスト化した。「火霊の話」は加治工真市の採集（1973）¹⁷によるものを加えた。

空想的で娯楽的な性格を持つ本格昔話は、現実の行事と結び付けて語られることはあまり多くない。鳩間島の伝承をみると、「蛇婿入」は、三月三日に女性が浜下り行事をするようになった由来、「運定めの話」は、男が噛み切った舌を埋めるとそこからショウガが生えてきたという植物の由来、「ピヤークの由来」は、魔物の話を立ち聞きして魔除けの方法を知り、額に鍋湯みを付けるようになったという習俗の由来、「十五夜由来」は、月明かりに照らされた自分の影に首から上がらないことで間男の存在を知って難を逃れた話で、結末には十五夜のお月見に供えるフカンガイ（餅）が赤い理由が語られる。「ナーマヤー由来」は、夜鳥が鳴いてわたるときは風邪除けのため、臼をたたいて唱えごとをするようになったという習俗の由来、「風邪の神様」は、七五三の左綱を張って感冒の流行を防ぐ行事や習俗の由来となっている。これらの由来譚は、一つの話型について複数の話者によって語られて

¹⁷ 加治工真市「鳩間島の昔話」『沖縄県八重山鳩間島方言』〈方言録音シリーズ15〉国立国語研究所、1973年。

おり、島内に根付いた話であることがわかる。このように、鳩間島で聴取できる昔話は、事物や行事の由来として語られる傾向にあることがわかる。

由来譚以外では、「火霊の話」がある。夜泣きする子どもを外にだしておいたため、神様にさらわれてしまう。その子は親の家に火をつけるように言われるが仮の小屋を燃やして煙と一緒に天に上がっていったという話であり、沖縄県内各地で聴取されている話型である。例話が少ないものとして、「カニマンデル」の話がある。これは単一話者による話型で、管見の限り沖縄県内の聴取話からは類話を見つけることができなかつた。日本全国から収集した話型を掲載している『日本昔話通巻 28 昔話タイプ・インデックス』¹⁸の話型名を参照すると、この話は蟹満寺（京都府）の縁起として伝承され中部地方以西の本土に多い話型であることがわかつた。その話がなぜ鳩間島で聴取できたのであろうか。伝承事情そして、話者はこの話を祖母から聞いたと記録されているが、本研究では詳細をたどることができなかつた。今後の課題としたい。

つぎに、鳩間島で聴取できた話型のうち、本稿では「ナーマヤー由来」と「風邪の神様」を取り上げて確認する。

鳩間島の「ナーマヤー由来」

〈モチーフ〉

- ①中森の墓地付近に住んでいた屋敷跡があるナーマヤーは子沢山で大変貧乏であった。
- ②ナーマヤーの人が海岸で感冒の神様の舟おろしを手伝い、お礼に風邪にかからなくなる方法を教わる。
- ③夜鳥が鳴いたときにはナーマヤーの孫子（マーッファ）だよといって臼を三回鳴たたくようになる。

つぎに、各要素について鳩間島の他の話者の伝承をくわえてイメージを探してみたい。

〈要素〉

[長間屋（ナーマヤー）]

- ・中森付近に屋敷跡がある、屋敷跡には貝殻の跡がある、村はずれ
→ 島に実在していた
- ・子だくさん、正直者、貧乏者
- ・石垣島に移住した、石垣島に親戚がいる

[夜鳥（ユーガラサー）]

- ・夜鳥が飛び回るとよくないことがおこる
- ・風邪を運んでくる

[風邪除けの方法]

- ・臼たたき・3回 → 音を出してはらう
- ・唱えごと「ナーマヤーのマーッファドー（長間屋の孫子だよ）」

[海浜・舟]

¹⁸ 稲田浩二ほか編『日本昔話通観 第28巻 昔話タイプ・インデックス』同朋社出版、1988年。

- ・海浜：感冒の神様と出会う場所
- ・舟：舟あげ、舟おろしを手伝う、風邪の種を積んでくる

〈考察〉

「ナーマヤー由来」の類話は八重山の各地で聴取されている。話型梗概と類話が紹介されている『通観 26』沖縄編¹⁹では、「むかし語り」の中の「病魔退散―川渡し型」「病魔退散―報恩型」「病魔退散―まじない由来型」の3つの型がある。「病魔退散」タイプの類話は沖縄県以外の地域でも確認できるが、サブタイプ「報恩型」では、典型話から類話まですべて八重山地域から聴取された話となっている。また、上記のうち、典型話に①のモチーフとなりそうな部分が欠落しているが、原話では波照間の本比田という男はたいへん「心がけのよい男」であったとして紹介されている。類話1の鳩間・男では、①の「心がけの良い男」はナーマヤーであり、伝承地域によって人物が異なることがわかる。類話2・類話3では来訪者に対して親切にした男が報われていることから、①のモチーフには困っている来訪者を助ける・親切にするといった行為が含まれるとみてよい。また、類話1の鳩間島の話とその他の話では、魔除けの方法が異なっている。典型話・類話2・類話3では、七五三の綱を張り、魔除けの貝やニンニクを下げしておくという方法がとられる。しかし、鳩間島では臼を杵でたたくという方法を教わっている。この違いはどこからくるのであろうか。同じ「ナーマヤー」「夜鳥」をモチーフに持つ別の話型からみていくことにする。

八重山地域全体でみると、「夜鳥」は「風邪」ではなく「火災」をもたらすとされており、臼をたたいて夜鳥を追い払うのは火災除けのためであることがわかる。もう一つ、宮良當壯『八重山語彙』²⁰から「ヨーラサー」をひくと、そこで紹介されている伝説では、ヨーラサーの正体はムヌンシィであり、死後、火吹鳥になって火を放つものとされている。長間筑登之は獄丁という立場にあり、情け深いひとである。また、この話でも臼を叩いて火を払う方法を教わっている。

これまでに見てきたナーマヤーが登場する話において、鳩間島以外の八重山地域では火災除け・火難除けとして語られているが、鳩間島においては火災除けのモチーフがなく、すべて風邪除け・病魔除けとして語られていることがわかった。

つぎに、ナーマヤーが登場しないタイプの病魔退散に関する話を確認しておきたい。

鳩間島の「風邪の神様」

〈モチーフ〉

- ① 荒天の日、浜を通りかかると寒さに震えながら舟をあげあぐねている人がいたが、最初に出会った男は助けなくて通り過ぎる。次に来た男は困っている人を助けてやり親切にふるまう。
- ② 助けられた人は、自分は風邪の神であると告げ、助けてくれた男の名を聞き、家に帰っ

¹⁹ 稲田浩二ほか編『日本昔話通観 第26巻 沖縄』同朋社出版、1983年。

²⁰ 宮良當壯「ヨーラサー」『八重山語彙』東洋文庫、昭和5年。297頁。

たら七五三の注連縄に動物の血を塗り、牛小屋の入口には貝柄をさげておくようにと風邪除けの方法を教える。

- ③ 風邪が流行ったとき、ほかの家の者は風邪にかかったが、親切にふるまった男の家族はだれも風邪にかからなかった。

つぎに、各要素について鳩間島の伝承が持つイメージを抽出する。

〈要素〉

[風邪の神様]

- ・舟でやってくる、舟あげの手伝い
- ・海浜で出会う

[風邪除けの方法]

- ・七五三の注連縄に動物の血を塗り、貝殻をさげる
- ・唱えごと：なし

〈考察〉

先に紹介した「118 病魔退散一報恩型」とほぼ類似した話である。ともに来訪者と出会う場所が浜や海となっており、舟にのってやってくる。登場人物や厄除けの方法が具体的に語られている点などがわかる。これは、現在も行っている行事などの由来として語られることが多いため、より具体性が強く表れるものと考えられる。風除けの方法では「シマッサル」という鳩間島の民俗行事の由来的な内容が語られている。

まとめ

鳩間島以外の八重山地域の伝承では「夜鳥」の鳴き声は災難を予感させ、とくに火難を与えるものとして認識され伝承されている。それに対し、鳩間島の伝承話には火難除けのモチーフはなく、「夜鳥」は風邪・感冒をもたらすものとして語られる。この伝承状況から、鳩間島では、火難よりも風邪の流行を嫌う傾向がみてとれた。

第5章 鳩間島のカムラーマ

カムラーマとキジムナー

鳩間島の豊年祭に演じられる奉納芸能のひとつにカムラーマがある。西村の弥勒踊りに続いて演じられる東村の演目であり、黄色い衣装の翁を先頭に数人の男児が後ろに続いて登場する。宮良當壯は『八重山語彙』の中で「カムラーマは河童である」²¹とし、遠藤庄治は「沖縄の妖怪と人間を脅かす異類」の中で「鳩間島ではキジムナーが豊年祭にも登場」し「祀られる存在である」²²として紹介している。両氏の説によると、鳩間島のカムラーマは河童やキジムナーと同類のものであるらしい。河童やキジムナーの類のものであるならば、何故豊年祭で祀られているのであろうか。遠藤による結論はつぎのとおりである。

²¹ 宮良當壯『八重山語彙』甲篇。第一書房、1980年。249頁。

²² 遠藤庄治「沖縄の妖怪と人間を脅かす異類」遠藤庄治著作集編集委員会編『遠藤庄治著作集 沖縄の民話研究』第一巻、NPO法人沖縄伝承話資料センター、2010年。383頁。(初出は篠田知和基編集『鬼とデーモン』(比較神話学シンポジウム)、比較神話学研究組織 GRMC、2001年。156-161頁。)

鳩間島では、キジムナーが豊年祭にも登場する。この島の豊年祭では、ミルク神の供として、真っ裸の幼児がマラタリミルクと呼ばれて登場する。そして、この幼児たちは、カムラーマとも呼ばれていた。カムラーマとは、鳩間島のキジムナーの呼称である。カムラーマは、豊穰の神として祭りに登場していたのである。これは本土において水神や山の神を祀ることと対応しているのである。

ひとつ注意しておきたいのは、東村のカムラーマはミルク神の供として登場するのではないという点である。西村の弥勒踊りの次に演じられるが、翁を先頭に男児が数名連なって出てくるというもので、演目としては別物となる。ただし、カムラーマのことを「マラタリミルク」と称する例話があるため、ミルク神と関連付て認識されていることはいえる。

さて、遠藤が指摘する「カムラーマ＝豊穰神」とはどういうことであろうか。本稿では、鳩間島の豊年祭とカムラーマの関係性を明らかにし、島民が持つカムラーマ像を詳らかにすることを課題とする。まずは、河童やキジムナーについてそれぞれの特徴を整理し、つぎに、鳩間島の豊年祭の儀礼としてのカムラーマと、筆者が聴取した口頭伝承について紹介しながら考察した。

キジムナーの主要話型

ここでは、遠藤の「沖縄民話への誘いーキジムナーとカップー」²³の記述から沖縄各地におけるキジムナーの伝承とその特徴を確認しておきたい。遠藤は、沖縄各地のキジムナーの呼称や性格を整理し、キジムナーと本土の河童との比較・考察を行っている。以下に「河童およびキジムナーの呼称と話型」の項より、関連する箇所を引用する。

- ① 河童とキジムナーの両者とも多様な呼称が存在し、両者とも童形である点が共通している。童形は、王子神や座敷わらしのように、神が童形で出現したとする信仰に由来している。
- ② 河童は、ミズチ系統、水神・水天系、山系統、猿公系統、兵主系統の呼称に水の精霊または神としての古い信仰を止めている。
- ③ キジムナーは、童形であるに止まらずに、神聖な色である赤が強調されており、またその居所も樹木信仰と関連する巨木に因む呼称であった。
- ④ 人に恩義がある河童はお礼として魚を届け、キジムナーは親しくなった人間に海の幸をもたらす。両者は水に因むものを人間に恵む点が共通している。河童については、その関係が成立する以前、キジムナーについては、その関係が壊れた場合には禍をもたらすことになる。人間と異類とのこの関係は、禍福が表裏一体に

²³ 遠藤庄治「沖縄民話への誘いーキジムナーとカップー」『南島文化への誘い』（沖縄国際大学公開講座7）、沖縄国際大学公開講座委員会、1998年。271-272頁。

なっている点が共通する。

- ⑤ 河童が屁で撃退されることから、本土では容易なことを「屁の河童」と言い、キジムナーもまた屁を嫌う。神や精霊と同じく、不浄なものを嫌う存在であることが注目される。また鶏の鳴き声を怖がることも両者は共通しており、他の神及び精霊と同様、その活動時間がたそがれ時から鶏が鳴く朝までであることを示している。さらに本土の河童は、「蛇婿入」の水乞型と同様に金気のことを恐れ、沖縄のキジムナーを追い払う場合には、住処になっている大木に釘を打つことが一般的である。
- ⑥ 河童祭りは田植えで最も雨が必要な旧暦の六月十五日に行われる。この日は沖縄各地の稲の大祭であるウフウマチーの日と一致する。

①の童形については、鳩間島の豊年祭に登場するカムラーマの姿とも一致する。また、③の赤色の強調についても、カムラーマの扮装や歌詞との関連をうかがうことができる。④の水に因むもの（富・豊作）を人間にもたらすこともあれば禍をおよぼすこともあるという点で、禍福が表裏一体であるという。妖怪というより、②にある水の精霊または神としての性格のようなものがあらわれていると考えられる。⑤の金気を嫌うという点は、鳩間に「かんざしをくわえて難を避ける」というモチーフがあり、共通している。⑥の旧暦六月の祭りは、まさに鳩間島においても豊年祭がおこなわれる時期であり、そこでカムラーマが演じられることは、子孫繁栄だけにとどまらない、生命の豊穡への祈りが根底にあることがうかがえる。

キジムナーの両義性

遠藤は、「沖縄の妖怪と人間を脅かす異類」²⁴という論攷でもキジムナーについてまとめている。「キジムナーの山仕事」の項では、例話①で大宜味村田嘉里に伝えられる六又屋（むちまたや一）の話を取りあげ、本土の河童は寒い冬には山に登って山の神となるが、沖縄のキジムナーも冬は炭焼き釜の火にあたりきりて山仕事を手伝うことがあるとし、田嘉里にはブナガヤに運んでもらった材木で建てた家があって今もブナガヤを祀って拝んでいるのだという。また例話②では、竹富町黒島に伝わるユイピトゥ加那志を取りあげ、家の落成式にもてなす行事が行われ、やがて家の守り神として棟木に飾られると紹介している。この例では、水に因むものを恵むだけではなく、山の神としての側面をうかがうことができる。これら建築儀礼とかかわるキジムナーの存在等については、赤嶺政信の論^{25, 26}に詳しいので、ここでは詳述しない。

そのほか「祀られるキジムナー」の項で、拝まれる存在としてのキジムナーについて例

²⁴ 遠藤庄治「沖縄の妖怪と人間を脅かす異類」。遠藤庄治著作集編集委員会編『遠藤庄治著作集 沖縄の民話研究』第一巻。NPO法人沖縄伝承話資料センター、2010年。383頁。（初出は篠田知和基編集『鬼とデーモン』（比較神話学シンポジウム）。比較神話学研究組織 GRMC、2001年。）

²⁵ 赤嶺政信「キジムナーをめぐる若干の問題」『史料編集室紀要』19、沖縄県立史料編集室、1994年。

²⁶ 赤嶺政信「建築儀礼にみる人間と自然の交渉—沖縄・八重山諸島の事例から—」。松井健編『自然観の人類学』榕樹書林、2000年。

が示されている。例話①では、大宜味村喜如嘉で福木の太木がある家のおばあさんがブナガヤを他に移すためにご馳走と酒を供えて拝んだとのことで、大宜味村のブナガヤは拝まれる存在だという。また、例話③として鳩間島の豊年祭に登場するカムラーマについてふれ、これは本土において水神や山の神を祀ることと対応していると論じている。

ここまでは、河童・キジムナーの特徴についてみてきた。次章では、鳩間島のカムラーマについて、民俗芸能としての資料と口承伝承の例を示し、島の人々が持つイメージについて考察をすすめる。

豊年祭のカムラーマ

鳩間島の豊年祭は毎年旧暦6月に行われる。祭の全体像については、『竹富町史 第六巻 鳩間島』²⁷や大城學の論文²⁸に詳しいので、それらの文献を確認していただきたい。トープン（当日）のサンシキ（栈敷）における芸能の1番目の出し物は西村の弥勒踊りである。それに続く出し物としてカムラーマが登場する。

翁を先頭にして男児が数人並んで続く。翁は黄色い衣装・頭巾で杖とクバオウギを持つ。男児も黄色い衣装で頭にはシュロ毛を被っている。近年は女兒も混ざる。翁を中心にして円陣をつくり、太鼓と銅鑼に合わせてうたう。翁が子どもたちを撫でる所作をするとき、全員しゃがみ込んでじっとしている。かつては地面を転がることもあったという。

カムラーマの翁の所作は祓いであるとされており、無病息災、子孫繁昌などの願いが込められている。鳩間島の祭りのなかにみるカムラーマは、豊穰と子孫繁昌の神としての側面を持つことが確認できる。

口承伝承のなかのカムラーマ

鳩間島で怪異現象や怪光現象の話を聴取した際、木の精や火の玉のことを「カムラーマ」あるいは「マーザ火」と表現していた。集めると、ピーダマという火の玉（魂）系の話、カムラーマやキジムナーといった妖怪系の話、それらの中にあたるマーザ火の話がある。

話者が「ピーダマ」の話だと認識して語ったものでは、ピーダマは火災の原因としての要素を有しており、同時多発的に発生する。それは、叩くことや水を置いておくことで排除したり予防したりできるらしい。また、ピーダマの姿を見ることができるとできない人がいて、今では見る人がいなくなってしまったという。そして、「ピーダマ」と「カムラーマの火」とは違うものと区別して認識されていることがうかがえ、「ピーダマ」の発生要因が死んだ親子の霊であるかのように語られる例もあった。ガジマルの木のあたりに見える火は、蛸を洗っていた母に話しかけた途端に消えて見えなくなったという。

つぎに、「キジムナー」と「カムラーマ」に言及した例では、「キジムナーのことを鳩間ではカムラーマという」「ガジマルの下によくいたらしい」「キジムナーは悪戯をする」「木の精と仲良くすると繁盛する」「かんざしを口にくわえると大丈夫」などがある。キジムナーとガジマルとの関係が示されている。木の精であること、仲良くすると福をもたらすこと、

²⁷ 大城學「豊年祭の儀礼と歌謡」『竹富町史 第六巻 鳩間島』竹富町史編集委員会、2017年。301-321頁。

²⁸ 大城學「鳩間島の豊年祭の儀礼と歌謡」『沖縄の祭祀と民俗芸能の研究』砂子屋書房、2003年。847-889頁。

悪戯をすると禍があること、かんざしをくわえることで難を避けられることがわかる。

もう一つ、木の精のキジムナーをカムラーマといい、マーザ火ともいう例話がある。この例では、キジムナーとカムラーマが同じであること、寝ている人を押さえつけること、ガジマルにいること、顔が赤く髪が垂れているといった容姿の特徴もうかがえる。そして、カムラーマのことをマーザ火とも言っていることから、「キジムナー = カムラーマ = マーザ火」という関係性が見える。さらに、マーザ火の例話では、マーザ火とピーダマとは違うものであるとして区別されている。そして、近づく際に海水を蹴る音がする、悪戯好き、魚の目玉を取って食べる、おならを怖がるといった特徴が語られている。魚の目玉を好みおならを怖がることもキジムナーと通じる。

これらのことから、形状的に火の玉状に見えることもある「ピーダマ」と「カムラーマの火」・「マーザ火」だが、区別されて認識されていることがわかる。そして、伝承のなかのカムラーマは、祭りでみる豊穰や子孫繁昌の神としての側面だけではなく、沖縄本島圏のいわゆるキジムナーや本土圏の河童と類似した性格を持ち、禍福両面をつかさどる存在として畏怖されていることがうかがえる。

まとめ

このカムラーマの多義性について、参考話を示しておきたい。これは、大城公男『八重山 鳩間島民俗誌』²⁹からの引用である。

カムラーマについては伝承もある。昔唐の国から一人の男が鳩間島にやって来た。男は何の所持品も持たず、ただ一粒のマメの種を持っていた。その種を植えてマメを育て、七人の子どもを育て上げた。その故事に由来するという。短い伝承ではあるが、農耕社会の予祝儀礼としての構成要素は十分に備えている。マメは豊穰の、そして七人の子どもは子孫繁昌と村の繁栄の象徴である。唐からやって来たといわれるその男は、あるいは遠い異界からやって来た神であったかもしれない。

この参考話では、カムラーマの子孫繁昌と豊穰の予祝、そして来訪神としての要素を指摘している。伝承事情は明示されていないが、「七人の子どもを育て上げた」とされる男の人物像については、「夜烏の教え・ナーマヤー由来」という話型に登場する「ナーマヤー」が浮かんでくる。話の中のナーマヤーは、大変貧乏なうえに子だくさんで、苦勞して子育てをした男であったが、やがて子どもたちもみんな立派に成長し、新築祝に村人を招待するという成功譚が語られる。そして、大変誠実な男は、ある日、海岸で舟を下ろそうと困っているものを助ける。助けてあげたのは実は感冒の神様で、夜烏が鳴き渡るときには、「ナーマヤーヌ マーッフアドー」と唱えながら臼を叩くようにという除災の方法を教わる。それ以来、ナーマヤーの者が感冒にかからなくなったので、村中が真似るようになったという

²⁹ 大城公男『八重山 鳩間島民俗誌』琉球弧叢書 25、榕樹書林、2011年。285-286頁。

由来譚が付加されて語られる。

カムラーマとナーマヤーがもし島人の意識の底でつながるならば、カムラーマの儀礼には単に子孫繁昌だけではない思想が確認できる。両義的存在のカムラーマに、豊穰と無病息災とを祈念する島人の伝承意識が表象されている。

終章

鳩間島の伝承の特質

第2章 鳩間島の島建て伝承では、島に伝わるフナヤギサマの人物伝承を取り上げ、鳩間島のほか石垣島や竹富島の雨乞い歌に登場するフナヤギサマ像についても検証した。鳩間島で聴取した伝承の内容をまとめると以下のとおりである。

〈フナヤギサマ〉

- ・鳩間村の創建にかかわる
- ・友利御嶽と関係があるらしく、西堂御嶽はギサマのお墓である
- ・宮古島との関係があるらしく、お墓である西堂御嶽は宮古を向いている
- ・雨乞い歌に登場するが事績の具体例が乏しい

村建ての英雄とされる割には鳩間島での伝承内容が希薄であった。そこで、周辺離島へと資料の範囲を広げ、雨乞い儀礼にかかわるフナヤギサマの伝承を眺めてみた。竹富島や石垣島の平得の雨乞い歌や儀礼からは、井戸掘り技術、造船技術、航海技術などを持ち合わせた人物や集団のイメージがより具体的に浮かび上がってきた。また、雨乞い儀礼の伝承については、参考話として黒島の「雨の神」の例話を紹介し、野原井戸とそこにまつわる雨の神の描写から、鳩間島の雨乞い歌の行為についてより詳細なイメージをつかむことができた。さらに、雨の神像、水神像が海の彼方から船に乗ってやってくる、天の神ではなく龍宮神とのつながりを意識していることがわかる。

このように、鳩間島に伝わるフナヤギサマの伝承は希薄であるが、周辺地域の伝承や歌謡からその人物像（あるいは集団）が浮かび上がることが確認できた。

関連する友利御嶽については、鉄文化、鍛冶技術集団、鍛冶炭職人とのかかわりが谷川健一³⁰によって指摘されている。沖縄県内各地の鉄人譚、王権伝承とのかかわりについて、多良間島、竹富島、西表島祖納、与那国島で語られる鉄人があり、航海技術を持ち合わせている様子が包含されている。

さらに、平得のギサマはウーリヤーの七人兄弟の長男であるとされるが、これと同じような七人兄弟譚が与那国島の伝承³¹にもある。その大屋の七兄弟は井戸掘りや集落の基礎を整えたとして伝えられており、親類からも冷笑されるほどの極貧の暮らしから発憤興起し、水田開発で成功したとされている。この七人兄弟譚は鳩間島のナーマヤーの人物像ともつながる。鳩間島の伝承のみではよくわからなかったことが、周辺離島の伝承と比較するこ

³⁰ 谷川健一『列島縦断 地名逍遥』富山房インターナショナル、2010年。180頁。

³¹ 池間栄三『与那国の歴史』池間苗、1997年。102-103頁。

とでその欠落部分を補いつつ推察することができた。

第3章 鳩間島の「産神問答」と「炭焼き長者一再婚型」では、日本全土に広く伝承される運定め話のうち、鳩間島で聴取した「炭焼き長者一再婚型」「運定め一男女の福分」「産神問答」タイプについて考察した。

鳩間島で聴取した伝承の内容をまとめると以下のとおりである。

〈炭焼き長者一再婚型〉

- ・鳩間島の伝承では「産神問答」のモチーフが欠落し、単独で語られる
 - ・ピヤックといって産まれた子の額に鍋墨をつける役払いの呪法とかかわる
 - ・結末部では切れた男の舌から生えてきたのはショウガであるとされる〔植物由来〕
- *周辺地域では、蟬（鳴き声をもじって）や亀（笹に隠れた様子から）の由来になる

〔動物由来〕

この炭焼き長者の話の背景には、人の福分を授ける産神の存在や魔除けとしての額の鍋墨の効力などを信じる思想がある。鳩間島の聴取話の特徴として、「産神問答」の部分が欠落しながらも独立した話として語られるということが指摘できる。ピヤックという習俗の思想は今も息づいており、赤ちゃんなどが外出する際には、指で額につばをつけるなどの行為がみられる。この鍋墨については『遺老説伝』³²にも宮古島の野崎村の伝説として記録されており、習俗行為の由来譚が確認できる。また、結末部は事物の由来譚となる。人間の一部分（舌）が鳩間島と同じようにショウガになったとする例は竹富島にもあり、恥じ入って笹に隠れて亀になる例が石垣島や小浜島に、蟬になる例が黒島にあるなど、八重山諸島においてはその結末部が動植物への転生譚となることから、死体から栽培植物が発生したとする「死体化生型³³」を受容する風土があることが多くの研究者によって指摘されている。

さらに、この話型も鉄や鍛冶技術者集団とのかかわりが指摘されるものである。このことは、第2章でみたフナヤギサマ伝承に結びつくのではないかと考えたが、本研究においては鳩間の島建てに関連する集団とのかかわりをはっきりと示すことはできなかった。今後の課題としたい。

第4章 ナーマヤー由来 病魔退散一報恩型では、鳩間島で聴取した本格昔話の中から、「ナーマヤー由来」と「風邪の神様」を取り上げて検証した。『通観』（第26巻 沖縄）³⁴で「病魔退散」タイプの類話をみると、サブタイプ「一報恩型」は、典型話から類話まですべて八重山地域から聴取された話となっている。この話は、主として沖縄本島北部や先島地域からの聴取話が掲載されており、除災の由来などが語られるものだが、鳩間島の場合、話の登場人物であるナーマヤーという人物が実際に島で生活していた跡があると語られる

³² 嘉手納宗徳『沖縄文化史料集成6 球陽外巻 遺老説伝』角川書店、1978年。116頁。

³³ 死体化生型：神や巨人、人間などの死体から、世界の万物や有用な作物などが生じたとする説話の総称。（後略）（文責：越野真理子）大林太良 吉田敦彦監修『日本神話辞典』大和書房、2012年。

³⁴ 稲田浩二編『日本昔話通観』（第26巻）沖縄、同朋舎出版、1983年。

特徴がある。そのナーマヤーは、貧乏人の子たくさんで村人からも馬鹿にされていたが、やがて子どもたちが大きくなると家を建てるくらい栄えるのだと語る。鳩間島以外では登場人物についてはあまり語らず、海岸で困っている者を助けた親切が報われて病魔の退散方法を教わるという展開に主眼が置かれる。ナーマヤーの子ども達の出世譚をあわせて語りたがる鳩間島の人々は、どのような思いで語り伝えてきたのだろうか。

この話で除けたいと考えている「病魔」とは流行病や疫病のことである。そして、ヨーラサー（あるいはユーガラサー、夜鳥、ゴイサギ）の不気味な鳴き声を予兆と捉え、臼を叩いて追い払う。石垣島には、このヨーラサーの正体を獄死した易者だと伝える話がある。その時の獄吏がナーマヤーであり、易者は死ぬ前に自分はヨーラサーに生まれ変わって火難をもたらすと告げ、親切にしてもらったナーマヤーにはその火事除けの方法を授けるといふ流れになる。つまり、ヨーラサーの正体は怨霊であり、その怨念によってもたらされる災いは火難であり、除災のためには臼を叩いて音を出し自分の氏素性を名乗るといふ方法がとられる。ヨーラサーがもたらす災いの種類は異なるが、除災方法は同じである。そして、除災の方法は来訪者に親切にした正直者であるナーマヤーに伝授される。この種の話の根底には、来訪者を歓待すべしという教えがあり、「大歳ノ客」や「弘法清水」などの話のように、遊行宗教者や鋳物師など巡回する職能集団が伝播者となって自身を擁護する自己擁護の文芸であることも指摘されている。八重山地域にまで彼らが渡り来ていたかどうかはこれだけで断定することはできないが、近年まで継承されてきた行為や伝説の中にその名残がうかがえる。

第5章 鳩間島のカムラーマでは、豊年祭に演じられる奉納芸能の一つであるカムラーマとその伝承について検証した。西村の弥勒踊りに続いて演じられる東村のカムラーマは、黄色い衣装の翁の後ろに数人の男児が続いて登場する。宮良當壯は「カムラーマは河童である」³⁵といい、遠藤は「鳩間島ではキジムナーが豊年祭にも登場し、祀られる存在である」³⁶と述べている。両氏の言によれば、鳩間島のカムラーマは河童やキジムナーと同類のものであるらしい。ここでは、鳩間島の豊年祭の儀礼としてのカムラーマと口頭伝承の内容についての検証を行った。

口頭伝承においては、カムラーマはキジムナーと同様の性格と行動を示す。ガジマルなどの老木に住み、赤い髪、赤い顔、小さい体、火玉の形状、悪戯好き、寝こみを襲う、蛸や屁が嫌い、金気の物を嫌う、友達として付き合っている時は良いが裏切ると仕返しをされるというように、禍福の両義性を持った存在である。一方で、豊年祭ではマラタリミルクという別称を持つ。大城公男³⁷によると、カムラーマには子孫繁昌、豊穰の予祝、来訪神としての要素があることが指摘されており、豆の種を携えて唐の国からやってきた男で、

³⁵ 宮良當壯『八重山語彙』甲篇、第一書房、1980年。249頁。

³⁶ 遠藤庄治「沖縄の妖怪と人間を脅かす異類」遠藤庄治著作集編集委員会編『遠藤庄治著作集 沖縄の民話研究』第一巻、NPO法人沖縄伝承話資料センター、2010年。383頁。（初出は篠田知和基編集『鬼とデーモン』（比較神話学シンポジウム）、比較神話学研究組織 GRMC、2001年。156-161頁。）

³⁷ 大城公男『八重山 鳩間島民俗誌』琉球弧叢書 25、榕樹書林、2011年。285-286頁。

七人の子どもを育て上げた事績が伝えられている。

まとめと課題

本研究で取り上げた鳩間島の伝承を順に概観し、第2章～第4章では、鳩間島の伝承の根底に「鉄」にかかわる集団の存在をうかがわせる要素があることが確認できた。そして、来訪神への畏怖と歓待の思考とを共同体の伝承から確認することができた。

鳩間島の島建てや御嶽の創建にかかわるとされる「フナヤギサマ」の伝説を周辺の地域の伝承にまで広げてみることで、人物像をより鮮明にみることができた。雨乞い歌や井戸掘りの伝承からは、水を得るための知識と技術、つまり、水脈を探しあてる知識・技術とその場所を掘り進める道具としての鉄器の存在が浮かび上がってきた。このことは、谷川健一の「友利・友盛—日本船の寄港地」³⁸で既に指摘されているように、鳩間島の友利御嶽の神名からも推測できるという。『琉球国由来記』卷二十一卷³⁹では、神名「ヲトモリ」、御イベ名「大ザナルガネ」とある。谷川は、これは竹富島の仲筋御嶽の祝詞にも「なるかね」ということばが見えろとし、「鳩間、竹富、与那国には友利姓が見られることと考え合わせて、沖縄本島から宮古島へ、さらに八重山へと南下した日本の人間たちがいたことが推測される」⁴⁰と述べている。また、大城公男は鳩間島の友利御嶽の祝詞を紹介して論を展開している。その祝詞にあらわれる神の名は「大トゥムル、大シクオン、玉ズニのナルザナルンガニ、ザルザザルンガニ」であると記し、「大ザナルガネ」は金属の属性に基づいた表現で、はじめて鉄器に接した人々の驚きと感動を表したものであろう⁴¹と解釈している。鉄器とのつながりは「炭焼き長者譚」からもうかがうことができた。

本研究がこれらの先達の指摘の裏付けにとどまるだけでなく新しい解釈を加えるとするならば、修験系の要素という点になるうか。一つは、「フナヤギサマ」に関する伝承にみる「井戸掘り」の要素である。これは、「弘法清水」や「杖つき井」と称して全国に伝わる密教系の大師伝説と重なる。諸国行脚の折に水を所望し、お礼に杖を突きたてて井戸や水の便をはかったとされる話で、異郷人歓待を説くものである。呪具としての杖については、水脈の標として用いた茅などとのつながりや、修験者や山伏たちが持つ錫杖のイメージが重なる。そして錫杖の上部に着く金輪が擦れる音色は、友利御嶽の神の名であるとされる「なるかね」や「ナルザナルンガニ、ザルザザルンガニ」の音を連想させるのである。また、「病魔退散」や「火難除け」を伝えるナーマヤーの習俗などの除魔からも修験道的な面がうかがえる。宮家準は「遊行宗教者 山伏の跡を求めて」⁴²で沖縄の遊行者について、「確証があるわけではない」と断りつつ次のように述べている。

(前略) 現在の段階では、修験的性格の遊行者が渡琉して積極的に活動したらしいと

³⁸ 谷川健一 前掲書。180頁。

³⁹ 外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』角川書店、1997年。496頁。

⁴⁰ 谷川健一 前掲書。180頁。

⁴¹ 大城公男 前掲書。147頁。

⁴² 宮家準「遊行宗教者」窪徳忠編『沖縄の外来宗教—その受容と変容—』弘文堂、1978年。137頁。

いうこと、及び沖縄内部を遊行した宗教者が、日本内地で修験者がはたしたと同じような主に除魔を中心とした機能をはたしていたと推測して置くにとどめたい。

宮家は補陀落渡海を試みて金武の浜に漂着した日秀上人などの跡を訪ねて、沖縄各地に修験系の名残を見出している。やしない親に対する習慣について「これも病弱な子供を不動明王の取子にする修験道の信仰に似ている」としているが、鳩間島にも同様の習慣がかつてはみられた。これらの少ない要素から断定はしかねるが、鳩間島の習俗からも修験道的な側面をうかがい知ることができる。

「カムラーマ」の伝承については、沖縄地域のキジムナー伝承と性格を同じくするものだが、豊年祭の中で「マラタリミルク」として登場することにふれた。西村の女性性を持つ豊穰神に対する東村の男性性を象徴する豊穰神である。口頭伝承ではいたずら好きで豊漁をもたらす側面が語られ、蛸や屁、金気の物を嫌うという。付き合い方を誤ると、金縛りや溺水などといった災厄をもたらす半面、よくしていると豊漁などを約束されるといった両義的な側面も他の地域のキジムナーや河童の伝承と重なることがわかる。その他、鳩間島のカムラーマの伝承からは、子孫繁昌と豊穰の予祝、来訪神としての性格をうかがい知ることができる。

これまで取り上げた聴取話の考察をまとめると、鳩間島の人々が島外からの来訪者を畏怖しつつも歓待している様子が推察される。そして、除魔の発想や方法といった習俗からは修験道系の信仰が伝わっていたであろうことも推測される。

鳩間島の島建て伝承や御嶽伝承の「薄さ」について人物伝説を例に確認したが、鳩間島の人々の信仰心とは比例しない。平成調査の際に出会った島の古老たちは自分たちの島を「神高い」島だといっばいばかりでなかった。1771(乾隆36)年に先島を襲った大津波の際に、向かいの西表島から鳩間島をみると島が鼎のように支えられ波が通過して行ったのだと伝わる。その津波の状況については、島を離れていた2名が犠牲になったことが文献資料に記されており、実際の被害も少なかったことがわかる。事実裏打ちされた伝承であった。

過酷な島での生活を乗り越えるには、自然や神への畏敬の念が現在よりも根強いものであったことは推測に難くない。筆者の大叔母はかつて鳩間島のサカサを務めていた。共同体レベルの祭祀はもとより、個人レベルの細々とした祈りも欠かすことなく丁寧に執り行っていた。

鳩間島の口頭伝承をどのように研究に活かせるかということを考えながら話を整理しつつ、周辺地域の伝承とからめて考察を進めてきた。島人の思考をどこまで汲み取ることができたのか課題は残る。本研究でみえた諸課題を今後の周辺地域の伝承研究の礎としたい。

参考文献・資料

- 1 稲田浩二編『日本昔話通観』(第28巻) 昔話タイプ・インデックス、同朋舎出版、1988年。
- 2 稲田浩二編『日本昔話通観』(第26巻) 沖縄、同朋舎出版、1983年。
- 3 東アジア民話データベース、
<http://minwadata.fm.senshu-u.ac.jp/EastAsiaMinwaDB/scholar/AreaDatabase/indexOkinawa.html>
- 4 福田晃「〈概説編〉昔話」 福田晃 編『沖縄地方の民間文芸〈総合研究〉I』三弥井書店、1979年。
- 5 辺土名朝三「沖縄の民話運動」日本民話の会編『民話の手帖』第14号 春 日本民話の会、1983年。146-156頁。
- 6 宮良安彦「八重山諸島石垣島の民話—古文献および標準語記述記の民話—」石垣繁編『宮良當壯記念論集』宮良當壯生誕百年記念事業期成会、2000年。
- 7 加治工尚子「鳩間島の民話沖縄国際大学文学部国文学科、平成九年度卒業論文、1997年。
- 8 竹富町史編集委員会『竹富町史 第六巻 鳩間島』竹富町役場、2015年。
- 9 大城公男『八重山 鳩間島民俗誌』榕樹書林、2011年。
- 10 外間守善・宮良安彦『南島歌謡大成 IV八重山篇』角川書店、1979年。
- 11 喜舎場永珣『八重山民俗誌』上巻・民俗篇、沖縄タイムス社、1977年。79頁。
- 12 貴志正造翻訳『神道集 東洋文庫(94)』平凡社、1967年。
- 13 加治工真市「鳩間島の昔話」『沖縄県八重山鳩間島方言』〈方言録音シリーズ15〉国立国語研究所、1973年。
- 14 宮良當壯「ヨーラサー」『八重山語彙』東洋文庫、昭和5年。297頁。
- 15 宮良當壯『八重山語彙』甲篇。第一書房、1980年。249頁。
- 16 遠藤庄治「沖縄の妖怪と人間を脅かす異類」遠藤庄治著作集編集委員会編『遠藤庄治著作集 沖縄の民話研究』第一巻、NPO法人沖縄伝承話資料センター、2010年。383頁。(初出は篠田知和基編集『鬼とデーモン』(比較神話学シンポジウム)、比較神話学研究組織 GRMC、2001年。156-161頁。)
- 17 遠藤庄治「沖縄民話への誘い—キジムナーとカッパー—」『南島文化への誘い』(沖縄国際大学公開講座7)、沖縄国際大学公開講座委員会、1998年。271-272頁。
- 18 赤嶺政信「キジムナーをめぐる若干の問題」『史料編集室紀要』19、沖縄県立史料編集室、1994年。
- 19 赤嶺政信「建築儀礼にみる人間と自然の交渉—沖縄・八重山諸島の事例から—」。松井健編『自然観の人類学』榕樹書林、2000年。
- 20 大城學「豊年祭の儀礼と歌謡」『竹富町史 第六巻 鳩間島』竹富町史編集委員会、2017年。301-321頁。
- 21 大城學「鳩間島の豊年祭の儀礼と歌謡」『沖縄の祭祀と民俗芸能の研究』砂子屋書房、2003年。847-889頁。
- 22 大城公男『八重山 鳩間島民俗誌』琉球弧叢書25、榕樹書林、2011年。285-286頁。
- 23 谷川健一『列島縦断 地名逍遥』富山房インターナショナル、2010年。180頁。
- 24 池間栄三『与那国の歴史』池間苗、1997年。102-103頁。
- 25 嘉手納宗徳『沖縄文化史料集成6 球陽外巻 遺老説傳』角川書店、1978年。116頁。
- 26 宮良當壯『八重山語彙』甲篇。第一書房、1980年。249頁。
- 27 外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』角川書店、1997年。496頁。
- 28 宮家準「遊行宗教者」窪徳忠編『沖縄の外来宗教—その受容と変容—』弘文堂、1978年。137頁。